

本棚



放射線を怖がらない看護職であるために 看護と放射線—放射線を正しく理解する—

日本アイソトープ協会 編



看護職が「放射線を正しく理解する」—原子力災害5年後に著された本書の副題であるこのフレーズは、看護職が放射線を正しく理解していない弊害を知る人々（筆者を含む）の長年の願い、努力目標、また実際に努力してきたことである。放射線の知識不足により、原子力災害時に看護職が専門職機能を十分に果たせなかったことの反省と教訓は、日本放射線看護学会の設立や放射線看護専門看護師制度の誕生などに具現化されつつあるが、その先には、看護職を養成する基礎コースで放射線教育を行うという更に大きな課題がある。そのためのハードル—養成校数が膨大、教える人が殆どいない等—を乗り越えるために、まず各校の看護教員に放射線を教える、そしてその教員たちが自校に戻って放射線教育の担い手となる、という「ティーチャーズ ティーチング」のポリシーのもと、その教員向けテキストとして編纂されたのが本書であるという。執筆グループを代表して草間朋子氏は、「放射線を怖がらない看護職であるために」、「放射線と向き合ってみましょう」とやさしく語りかけているが、その行間からは、既存体制を変えようとする強い意志と政治力を感じずにはいられない。

本書は「基礎編」と「演習編」の2部構成である。看護教育は演習を非常に重視する。とくに放射線教育では「測定が容易」という放射線の特徴を活かした教育戦略が大変効果的だと経験しているので、筆者の目はまず「演習編」に向かう。自然放射線の測定からポータブルエックス線装置による撮影時の被ばくまでの5テーマが配置され、受講者は個人線量計を着用しサーバイメータ

を携えて放射線を測り、結果を本書の表に書き込み、その作業から、放射線の性質や防護の原則、被ばくの区分などを理解していく。看護職のためのミニマムエッセンシャルな知識は、この演習でかなり身につくと思う。「基礎編」は12章あり、前半は、「放射線利用と看護職の役割」から始まり、放射線診断や治療などの実践面が解説される。その上で、被ばく、単位、影響、リスクなどの、いわゆる基礎の部分を後半で扱っている。実践の学問である看護に配慮した適切な構成と思うし、解説は概してわかりやすい。放射線リスクの章では、冒頭に、看護職は「リスクコミュニケーションの役割が期待されている」とある。大事な章であるし、現象や不確実性を数学的に考えたり表現したりすることに不慣れな読者もいると思うので、この章はもう少し解説が欲しいと思った。

ICRP 副委員長の Jacques Rochard 氏は2014年の日本での講演で、「リスクコミュニケーションは全世界的にみて失敗し、専門家と非専門家とのギャップを埋めることはできなかった」と述べ、専門家は市民に語りかけるナラティブ（物語）を編み出さなければならない、それは数値ではない、と強調されていた。氏が示唆するのは、ナラティブにより、非専門家である患者や地域住民がエンパワーされる（力をつけ、前向きになる）ことが、リスクコミュニケーションが目指すものであるということではないか。看護師や保健師は、さまざまなリスク要因に対峙し、患者や住民がそれらリスクとどう折り合いをつけて暮らしたらよいかと、日々人々に向き合い、関係を繊細に感じながら対話をしている。そこでは、看護提供上の専門知識（放射線を含む）だけでなく、眼差し、ハート、手などで醸し出される看護職の物腰や態度も重要な要素である。それが Rochard 氏が言うナラティブを編み出す行為であり、放射線とリスク要因の知識を得ることで、人々の更によりよい生活のための新たなナラティブを編み出すことができると思う。看護職が、放射線というリスク要因と他のリスク要因とのバランスを保ちながら人々と対話する、そのナラティブは、看護職自身で編み出さなければならない。

（小西恵美子 鹿児島大学医学部客員研究員・長野県看護大学名誉教授）

（ISBN978-4-89073-256-2, B5判 138頁, 定価本体1,944円（税込）, 日本アイソトープ協会, ☎03-5395-8035, 2016年）